Japanese Association for Religious Studies

み取る。虚無から「神への欲求」が生まれ出るのであり、虚無とは「神への欲求」＝志向性の契機として把握される。その限りで、シオランは虚無を「神性」を支えるものと捉えるのである。虚無が「神への欲求」を生み、虚無の如き人間の弱さが神を支えるという主張は、エックハルトの「根底」の概念の読み替えにおいても窺われる。すなわち、虚無という弱さが神へと直通する「宗教的可能性」であるという主張である。人間は曖昧な存在であるという前提の下で、そうした人間の曖昧さが神の無底的な深さに通じ、無底において神の深淵と人間の深淵とが一致する。主体的自己を形成する境界が溶け出していくような人間存在の曖昧さや弱さは、「虚無の曖昧な波」と形象化され、曖昧さと波を同時に意味するvagueという語のイメージを軸にして、神の深淵へと虚無が漂い流れていくイメージが喚起される。かくして虚無は、神の深淵に至る「形而上学的源泉」と押さえられるのである。シオランにとって、体験と思索を通して想定しうる限りでの神とは、自然神秘主義的な神でも人格神でもない。神は、人間の側のあらゆる限定・定義を越えたものとして、ただひたすらな無底的深淵として感受されている。ただしそれは、形象を脱却した「深み」として、人間の理性的把握の及ばない無底的深みとしか言いようのない「無限の不在」という情動において感受される神である。このように、シオランにおいて神は、「不在」という様態において、言い換えれば無という情動として捉えられるのである。それは神が存在する／しないという存在論的な水準での言明では必ずしもない。むしろ、シオランにおいて神は、無という情動において、あるいは無いことに気づき哀しむ情動として、その現前が感得されている。

このように、失われた対象への悲哀は、その遠ざけられている対象の豊かさをかえって逆証してもいる。この意味で、シオランのメランコリーは、所有できない神を所有しようとする欲望として捉えられるだろう。つまり、神が所有できないがゆえに欲望は一段と募るのであり、神への情動は信／不信とは無関係に生き残り続けるのである。あらかじめ喪失の対象があったのではなく、対象は喪失と同時的に生み出されるということがメランコリーの構造であるが、このことは、失われた対象を遡及的に神として見いだし哀惜するシオランの神への態度と深く関わっている。いわば、一度も所有されたことがないゆえに喪失されることもない対象が、あたかも失われたかのように感受されるという意味で、神の喪失とは想像上の喪失である。だがシオランは、不在と欠如という在り様で神と交流し、自らがそこから遠ざけられている神の現前を逆証的に示そうとするのである。

「関係」、「相続」、「あたかも」
――エックハルトを中心に――

高木保年

本発表は、「関係」、「相続」、「あたかも」という三つの観点から、マイスター・エックハルトの核心といってもよい思想の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

うちのひとつを明確化する。エックハルトといえば、「離脱」や「突破」という概念によって知られている。これらの概念に関する思想は、被造的世界との関係からの「離脱」の後、人間自身の固有性や神のペルソナをも「突破」して、一なる神、存在としての神、実体としての神にまで到達するというものである。しかしその一方で、「魂の根底における神の子の誕生」が挙げられる。魂の最も奥深いところで神の子との関係を認識し、人間が霊的に神の子と等しいものになることができるという思想である。このように、エックハルトの思想には一方では「関係」を脱していく概念系列があり、他方では「関係」そのものに意識を集中させる概念系列があるといえる。本発表ではエックハルトの「関係」の概念系列に焦点を当て、人間が神から何をどのように受け取ることができると考えられているかについて明らかにする。

まずは「関係」および「相続」についてであるが、神と人間との関係、神と被造物との関係は、「父」なる神が「言」を語りだすことによっている。さらに、「言」すなわち「子」が理念ののみならず事物の「関係」であることにもよっている。このことを前提として、人間は天の国を相続するということがいわれる。その際、人間は神の子にならねばならないという。しかし、この場合の相続の仕方は、事物の場合のように考えられてはならず、「自分のものでなければないほど、よりいっそう自分のものであり、自分のものであればあるほど、それだけいっそう自分のものではない」という仕方である。

このような「関係」および「相続」の意味は「あたかも」という語のエックハルトによる解釈を踏まえるとさらに分かりやすくなる。すなわち、「あたかも」という語は、似像の関係を表示しているのであり、「あたかも」という語によって、エックハルトが「それ自身にとっての存在」ではなく「他のものにとっての存在」を強調していることが見て取れる。「あたかも」キリストであるかのように説教することがそのままキリストに倣うことであり、「あたかも」神の子であるかのように、天の国を相続するということになる。

しかしながら、「あたかも」という語の解釈においては「似像」が問題になる。「似像」においては、一方では似ていることが、他方では似ていないことが取り上げられる。似ていないといわれる場合、そこには「形相」と「理念」の区別が横たわっている。しかし、似ているといわれる場合には、「すべての生じるものは、それに似たものから生じる」という観点から、「範型」・「似像」の枠組みで解釈される。

神と人間を結び付けているものが「子」であり「言」である以上、さらに、「子」の結び付きにかかわるものが「知性」である以上、積極的な「存在」の在り処を範型的な他のものへと帰するという構造が「関係」には存するのであり、いかなる仕方においても何も受け取らないという仕方によって、かえって魂の浄福が造り出されるということになるのである。

NII-Electronic Library Service